

寿岳文章と向日庵本

特定非営利活動法人向日庵理事 長野 裕子

寿岳文章（1900-1992）は、1932年から1952年にかけて居宅「向日庵」において私版事業を行っていました。「向日庵本」の名で知られる寿岳の私版は、同時代の私版のなかでも高い評価を得ていました。用紙に特別に注文した手漉き和紙を使用し、手ずから彩飾をほどこすなど、手仕事の美しさが活かされた質実で簡素な美しさを特長としています。なかでも寿岳の研究対象であったイギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの作品を翻刻した『唯理神之書』（1933）、『無染の歌』（1933）、『無明の歌』（1935）をはじめとする一連の書物は、ブレイク研究者としての寿岳の作品理解にもとづいた私版として、向日庵本の名が知られるはじまりとなった代表的なものです。また、式場隆三郎の『テオ・ファン・ホッホの手紙』（1934）、芹沢銈介の画彫による『絵本どんきほうて』（1936）など、柳宗悦が主唱した民藝運動に連なる工芸家と向日庵本とのつながりも見逃せません。そして、文章と妻静子による手漉き和紙調査の旅の記録である『紙漉村旅日記』（1943）は、和紙研究家としての寿岳を語るには欠かせない最も象徴的な書物といえるでしょう。やがて、戦争と時局の悪化による物資不足などの事情で刊行が一旦途絶えますが、時代が落ち着きを取り戻しつつあったとき、戦前から約束されていた書物の刊行を最後に、向日庵私版は閉じられました。

私版という出版形態が本来持っている特性を熟知する寿岳が、「印刷者と読者と書物の美しい共鳴が、いまの日本の読者からは期待できない」、「愛書家を目あてに、私版を出すことに意義を認めない」ということを理由に、そして、読者も愛書家も、寿岳の私版理論の肝要を理解せず拍子抜けの感が深い、として、ある意味で道半ばのまま向日庵私版の刊行を絶ったことは重要です。向日庵私版の出発と終焉を表裏として検討することは、書物のありようを考えるうえで意義があるといえるでしょう。そこで、刊行された向日庵本それぞれについて語るべき交友と誕生の物語はありますが、ここでは寿岳の書物観に焦点をあて、向日庵本を刊行した意図について検討することにより、向日庵本が今日にわたる意義を解明することを本論の目的としたいと思います。

「…二昔も前、私が向日庵私版を始めたときには、美しい活字の創制をもスケジュールに入れたうえで、能うならばスコラー・プリンター（学匠印刷者）たらんことを秘かに期していた。…読者もまた、これらの学匠印刷者に敬意を払い、需要と供給のあいだには、美しい共鳴があった。ところで、こうした共鳴を、いまの日本の読者から、はたして期待し得られるであろうか。はなはだ疑問とせざるを得ない。…」

わが国でも、モリス以後の近英私版家たちの作った美書を云々する者はいる。しかし中世の工芸を理想とするこれら一連の私版家たちの世界観を理解せず、美書美書と連呼することに、はたしてどれだけの意味があろうか。…〔近英私版家が、それぞれ社会主義者であったこと〕には、深い意味がこもる。…私の関心は、強くこの事実にはひかれ、むしろそれを中軸として、私の私版理論はうち立てているのに、この肝要な事実を認めようとする人がほとんどいない。拍子抜けの感が深いのである。…」

（寿岳文章「なぜ向日庵私版を復興しないか」、1951年、『壽岳文章書物論集成』、沖積舎、1989年、p.920.）

編集後記 寿岳文章を中心とした寿岳一家の文化的形成を追究する NPO「向日庵」の活動も三年目をむかえ、新たな展開を見せようとしています。

昨年の晩秋、寿岳文章先生の旧宅「向日庵」の現所有者のご好意により、初めてのリサーチが敢行されました。参加したのは向日市文化資料館の王城玲子氏と里見徳太郎氏、高木博志氏（京都大学人文科学研究所教授）、伊部京子氏（和紙造形家）、中島俊郎（甲南大学名誉教授）の5名でした。

往時をしのばせる端然とした向日庵のなかでも先生の書斎は姿をかえず私たちのまえにありました。弟子のおひとりは「森のような」と書籍が満ちあふれるこの書斎を称しましたが、その形容は正しいでしょう。先生のご関心の在り方が手にとるように分ります。先生ご自身の著書、柳宗悦をはじめとする著名人からの寄贈本の数々、先生が資料とされた文献類が整然と並んでいます。リサーチの目的は貴重な原資料を散逸させずに向日市資料博物館へ移し、保存することにあります。

第一資料として、時代の証言となる膨大な量に及ぶ寿岳先生への書簡類、若き日から綴られた日記、メモ類、知的源泉となった書籍の購入台帳原簿、先生ご夫妻が執筆された新聞、雑誌の記事などのスクラップ・ブック、草稿の未定稿、民藝運動の全貌をしめす『工藝』全巻揃えなど、いずれも初めて見るものばかりで瞠目の想いがありました。これらの原資料をもとに新しい寿岳文章像が提示される日も近いと信じます。貴重な資料を死蔵させることなく、その一部を『向日庵』次号から開示・紹介していきたいと予定しています。

今後の講演会のテーマとして、「ダンテ『神曲』翻訳」、「仏教と寿岳文章」、「柳宗悦の思想」、「聴竹居と向日庵」、「翻訳者としての寿岳しづ」、「ウィリアム・モリスと寿岳文章」、「河上肇と寿岳文章」、「『紙漉村旅日記』を読む」、「寿岳章子、寿岳潤の業績」などが候補としてあがっています。どうかご期待下さい。ご希望のテーマがございましたら事務局までお寄せ下さい。なお、寿岳文章の英文学者としての苗床となった関西学院文学部英文科の教育環境を論じた関西学院大学前学長の井上琢智氏の講演記録は次号に掲載されます。

もうひとつよろこばしいご報告があります。和紙研究でたえずご指導いただいている、同人の伊部京子氏が2019年度、京都市文化功労者の表彰に浴されました。寿岳先生がご存命ならばどんなに喜ばれたことでしょうか。心からお慶びを申しあげます。

私たちの活動にたえずご支援を賜っています皆様方に謝意を表したく存じます。また講演会のためご尽力を惜しまなかった皆様、会場を貸与して下さいました関係者の方々に感謝申し上げます。また本誌の発行については「京都府文化力チャレンジ補助事業」の助成を受けていることを感謝とともに明記しておきたく存じます。

特定非営利活動法人向日庵理事長 中島 俊郎

向日庵 3

2020 年 1 月 31 日発行

編集・発行 特定非営利活動法人向日庵

〒617-0002 京都府向日市寺戸町東ノ段 9 番地 9 <https://koujitsuan.kyoto>

印刷 甲南大学生生活協同組合複写センター

